

## 大学授業観の10年間の変化<sup>1)</sup>

### Changes of University students' attitudes toward their classes in ten years.

二宮 克美\*・杉山佳菜子\*\*・大島 昇\*\*\*・磯村 倫子\*\*\*\*

**要約** 大学生の授業に対する意識について、10年間の変化を比較検討した。調査協力者は、2002年度は情報社会政策学部生164名（男性98名、女性66名）、2012年度は総合政策学部生212名（男性155名、女性57名）であった。2つの年度ともに最も賛成が多かったのは、「(パワーポイントや)板書が見やすいことは大切だ」という意見であった。一方、最も賛成が得られなかったのは、「大学の教員には安心して相談できる」という意見であった。10年間の間に、教室管理や講義への要望に関する意見が低下していた。因子分析の結果、「自己の勉学態度」と「授業への積極的要望」の2因子が抽出された。この2軸で学生の授業観を4つのタイプに分類した結果、2012年度に「受容勉学」タイプが多いことが分かった。

**キーワード** 授業観、大学生、10年間の変化

#### 【問題および目的】

平成24年度学校基本調査（平成24年12月21日公表）によると、「大学・短大への進学率については、長期的に見て増加傾向にあったが、平成22年度をピークに、ここ2年微減し、専門学校への進学率は、3年連続で上昇」した。具体的には、過年度卒業者を含む大学・短大進学率は56.2%で、全年度より0.5ポイント低下した。一方、専門学校進学率（現役）は16.8%で、前年度よりも0.6ポイント上昇した。高等学校卒業者が高等教育機関で学修したい目標の変化（資格や免許の取得といった目に見えるものを求める）の兆しが見取れる。

10年前の平成14年（2002年）は、大学・短大への進学率は48.6%で、高等学校卒業者の約半数の者が大学などの高等教育機関に進学する直前の時期であった。またその時期は、2002年度に施行された（高等学校は2003年度）学習指導要領による、

いわゆる「ゆとり教育」の世代前に相当していた。

二宮・池尻・磯村・今井・桑村・高木・中村（2003）は、大学大衆化・多様化の時代に、それ以前の大学授業のあり方では、対処しきれない問題が出ていたとの考えから、大学生の授業に対する意識を調査した。具体的には、授業計画・授業技術・大学教員の人がら・学生の関心や態度などの観点から100の質問項目を用意した。その調査対象者は、上述したように「ゆとり教育」世代ではなく、その前世代であった。その研究で明らかにされた主たる結果は、以下のとおりである。①教員の授業技術（板書の見やすさ、声の聞き取りやすさ）に対する要望が強い。②授業を熱心に受講することや授業自体を無意味だとは考えていない。③男性は女性より「安直な授業や試験を望んでいる」。④上級生（3・4年生）ほど、教室管理（マナーの悪い学生を叱るべきだなど）を望んでいる、などである。

\*愛知学院大学 総合政策学部 教授 \*\*愛知学院大学大学院 総合政策研究科 研究員

\*\*\*愛知学院大学 総合政策学部 学部生 \*\*\*\*愛知学院大学 総合政策学部 実習助手

<sup>1)</sup> 本研究のデータは、平成24年度に二宮の指導のもとで実施した大島昇の卒業論文で収集されたものである。本研究は、平成14年度に収集したデータとあわせて再分析を行った結果の報告である。

また、二宮・桑村・池尻・磯村・今井・高木・中村・稲葉 (2003) は、因子分析の結果を用い、「授業への積極的な要望」と「授業に対する安直な考え」の2軸から、学生を4つのタイプに分類した。授業への要望が強く安直な考えは弱い「勉学型」、授業への要望も弱く安直な考えも弱い「従順型」、授業への要望が強いが安直な考えも強い「自分勝手型」、授業への要望は弱く安直な考えは強い「しらけ型」である。その後、この4タイプについて、杉山・二宮・宮沢・山本・桑村 (2008) ならびに杉山・二宮・竹市・小出 (2012) は、「教員への要望」と「自己の勉学態度」の2軸から、「要求実直」、「受容勉学」、「わがまま」、「なりゆき」の4タイプに分類している (図1)。

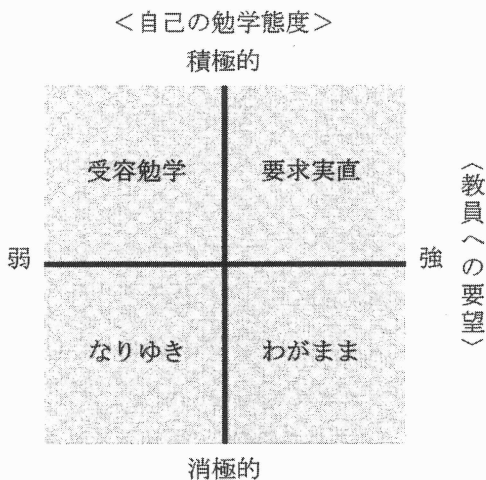


図1 大学授業観タイプ

本研究は、二宮ほか (2003) の2つの研究から10年が経過し、大学生の授業に対する意識の変化が見られるのかを、また4タイプの学生の異同も検討する。今回の調査対象者は、いわゆる「ゆとり教育」を受けてきた世代である。単なる10年間の経年的変化だけではなく、「ゆとり教育」世代前とその最中の者たちの意識の変化も検討することにしたい。<sup>\*</sup>

**【方法】**

**1. 調査協力者**

(1) 2002年度：全調査対象者606名から、調査協力者の属性をそろえるために、情報社会政策学部生164名 (男性98名、女性66名) を抜き出し、分析対象とした。

(2) 2012年度：総合政策学部生212名 (男性155名、女性57名)。

**2. 調査時期**

(1) 2002年度：平成14年11月から平成15年1月。

(2) 2012年度：平成24年6月。

**3. 調査項目**

二宮ほか (2003) で報告された100項目から、以下の7つの側面計33項目を使用した。①教員の人から (5項目)、②教員の講義の仕方 (5項目)、③講義の履修にかかわる事柄 (5項目)、④成績に対する意識 (5項目)、⑤教員の教室管理 (3項目)、⑥学生の講義への要望 (5項目)、⑦学生の講義に対する考え方 (5項目)。先生を教員に、授業を講義に、生徒を学生に言い換えたところはあるものの、質問内容はほぼ同一であった。

これらの項目に対し「あなたは次のような意見についてどのように思いますか、あてはまるところに1つ○をつけて下さい」という指示で、「非常に賛成」、「賛成」、「どちらかといえば賛成」、「どちらかといえば反対」、「反対」、「非常に反対」の6件法で回答してもらった。「非常に賛成」から「非常に反対」まで、順に6点から1点までの得点を割り当てた。得点が高いほど、その意見に賛成していると言える。

**【結果と考察】**

**1. 分析結果の概要**

調査実施時期 (2002年度 vs. 2012年度) × 性別 (男性 vs. 女性) の2×2の分散分析を行った。全体的に言えることを先にまとめておく。

(1) 得点が高く、その意見に賛成している項目上位3つは次のとおりである。

①「パワーポイント・板書が見やすいことは大切だ」

(時期・性別をまとめた全体の平均値 M ≒ 5.30,

以下同様)

②「学生の関心を引く話し方であれば講義が面白くなる」(M ≒ 4.91)

③「興味がないのに必修科目だから受けなければならぬのは嫌だ」(M ≒ 4.80)

いずれも講義への要望にかかわる項目であり、特に「板書の見やすさ」だけが5点を超えており、重視していることがわかる。

(2) 一方、得点が2点台と低く、その意見に反対している項目上位は次の3つである。

①「大学の教員には安心して相談できる」(M ≒ 2.68)

②「大学の教員は学生を対等に見ていなくても構わない」(M ≒ 2.91)

③「教員の人がらと学生の講義意欲に関係はない」(M ≒ 2.99)

これらはいずれも教員の人がらにかかわる項目である。大学の教員には、安心して相談できないが、学生を対等に見て欲しく、教員の人がらが講義意欲と関係していると考えている。

(3) 2002年度の得点が高かった項目は、11項目であった。その項目を列挙すると以下のとおりである。

「学生の反応に関係なく、教員の一方的な講義でも構わない」

「講義は時間割の都合上、仕方なく履修することがある」

「大学までの交通の便が履修に影響を与えていると思う」

「講義は教員の名前で選ぶようにしている」

「単位認定に対する評価にあいまいさを感じる」

「試験の点数だけで成績が決まるのは納得ができない」(図3. 参照)

「大学の教員はマナーの悪い学生をきちんと叱るべきだ」(図4. 参照)

「私語をしてもよい雰囲気講義は教員に責任がある」

「パワーポイント・板書が見やすいことは大切だ」

「学生が参加できるように工夫された講義を望んでいる」

「興味がないのに必修科目だから受けなければならないのは嫌だ」

10年間のあいだに、こうした教室管理や講義への要望や成績に対する意見に賛成することが低下している。

(4) 2012年度の得点が高かった項目は、4項目であった。

「時間にルーズな教員でも人がらが良ければ許せる」

「教員が威圧的な感じの話し方をするのは嫌だ」

「大学では何よりも成績が大切である」

「講義中の居眠りは講義の妨げにならないなら構わない」(図5. 参照)

こうした意見に「ゆとり教育」世代は、賛成していると言える。

(5) 男性の得点が高かったのは、5項目であった。

「教員の人がらと学生の講義意欲に関係はない」

「大学の教員は学生を対等に見ていなくても構わない」

「大学の教員はマナーの悪い学生をきちんと叱るべきだ」(図4. 参照)

「講義中の居眠りは講義の妨げにならないなら構わない」(図5. 参照)

「卒業のために仕方がなく講義を履修する」

教員の人がら・行動にかかわる項目などで、男性は賛成していると言える。

(6) 女性の得点が高かった項目は、次の1項目だけであった。

「試験の点数だけで成績が決まるのは納得ができない」(図3. 参照)

## 2. 質問項目別の分析結果

以下7つの側面別に、項目ごとに詳しく結果を見ていく。

1. 教員の人がらにかかわる項目 (表1)

(1) 教員の人がらと学生の講義意欲に関する性別に主効果があり ( $p<.05$ ), 男性の得点が高かった。女性の得点は、2つの調査時期ともにすべての項目の中でも最も低い値であり、この意見には賛成していなかった。つまり、女性は「教員の人がらと学生の講義意欲には関係がある」と思っている。

(2) 時間にルーズな教員でも人がらが良ければ許せる

年度に主効果があり ( $p<.05$ ), 2012年度の得点が高かった。「ゆとり教育」世代は、教員の人がらをやや高く評価している。

(3) 大学の教員には安心して相談できる

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。得点は2.5~2.7と33項目中最も低く、「大学の教員に安心して相談できる」とは思っていないことがわかる。

(4) 大学の教員は学生を対等に見ていなくても構わない

性別に主効果があり ( $p<.05$ ), 男性の得点が高かった。得点としては、ニュートラル・ポイントの3.5以下であり、この意見に「反対」していると言える。

(5) 教員は学生に親しみを見せなくても構わない

調査時期ならびに性別ともに有意差はな

かった。得点としては、「反対」の値であった。つまり、教員は学生に親しみを見せて欲しいと思っているようである。

2. 教員の講義の仕方にかかわる項目 (表2)

(6) 学生の反応に関係なく、教員の一方的な講義でも構わない

年度に主効果があり ( $p<.01$ ), 2002年度の得点が高かった。2012年度は男女ともに2.8という得点で、この意見に「反対」を表明している。教員の一方的な講義には、反対であると言える。

(7) 学生の理解度にあわせた講義のペースにするべきだ

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。しかし、この項目だけに交互作用がみられた ( $p<.05$ )。得点は4点台であり、「学生の理解度にあわせた講義のペースにするべきだ」という意見に「賛成」しているが、図2に示したように、女性の得点が、2012年度にかけて低くなっていることがわかる。

(8) 教員が威圧的な感じの話し方をするのは嫌だ

年度に主効果があり ( $p<.05$ ), 2012年度の得点が高かった。得点はすべて4点台で、「賛成」の方である。「ゆとり教育」世代は、教員の威圧的な話し方を嫌っていると言える。

(9) 自宅でする課題 (宿題・レポート) の量が

表1. 教員の人がらにかかわる項目

		2002年度		2012年度		年度 F値	性別 F値	交互作用 F値
		n	平均値 (SD)	n	平均値 (SD)			
1. 教員の人がらと学生の講義意欲 に関する関係はない	男性	98	3.02 (1.44)	155	3.17 (1.70)	1.65	4.16 *	.13
	女性	66	2.62 (1.03)	57	2.89 (1.46)			
2. 時間にルーズな教員でも人がらがよければ許せる	男性	98	3.68 (1.27)	155	4.00 (1.58)	6.85 *	1.60	.35
	女性	66	3.39 (1.20)	57	3.89 (1.32)			
3. 大学の教員には安心して相談できる	男性	98	2.63 (1.05)	155	2.75 (1.23)	1.36	.22	.06
	女性	66	2.55 (0.95)	57	2.72 (1.08)			
4. 大学の教員は学生を対等に見ていなくても構わない	男性	98	3.23 (1.43)	155	2.89 (1.54)	1.22	6.45 *	1.22
	女性	66	2.67 (1.09)	57	2.67 (1.30)			
5. 教員は学生に親しみを見せなくても構わない	男性	98	3.29 (1.24)	155	3.21 (1.50)	2.08	2.27	.80
	女性	66	3.20 (1.03)	57	2.86 (1.08)			

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ , \*\*\*  $p<.001$  (以下同じ表記)

表2. 教員の講義の仕方にかかわる項目

		2002年度			2012年度			年度	性別	交互作用
		n	平均値	(SD)	n	平均値	(SD)			
6. 学生の反応に関係なく、教員の一方的な講義でも構わない	男性	98	3.58	(1.28)	155	2.84	(1.67)	9.91 **	2.71	2.43
	女性	66	3.08	(1.11)	57	2.82	(1.21)			
7. 学生の理解度にあわせた講義のペースにするべきだ	男性	98	4.46	(1.30)	155	4.57	(1.42)	1.57	.53	4.33 *
	女性	66	4.85	(0.77)	57	4.39	(1.10)			
8. 教員の威圧的な感じの話し方をするのは嫌だ	男性	98	4.29	(1.38)	155	4.41	(1.65)	4.50 *	1.55	1.76
	女性	66	4.27	(1.23)	57	4.82	(1.14)			
9. 自宅でする課題(宿題・レポート)の量が負担になるような講義は困る	男性	98	4.53	(1.21)	155	4.72	(1.47)	.14	.89	.94
	女性	66	4.80	(1.01)	57	4.72	(1.11)			
10. 講義中に冗談を言ったり、間をとったりする教員は好きだ	男性	98	4.77	(0.89)	155	4.88	(1.19)	2.35	.53	.28
	女性	66	4.79	(0.75)	57	5.02	(0.88)			

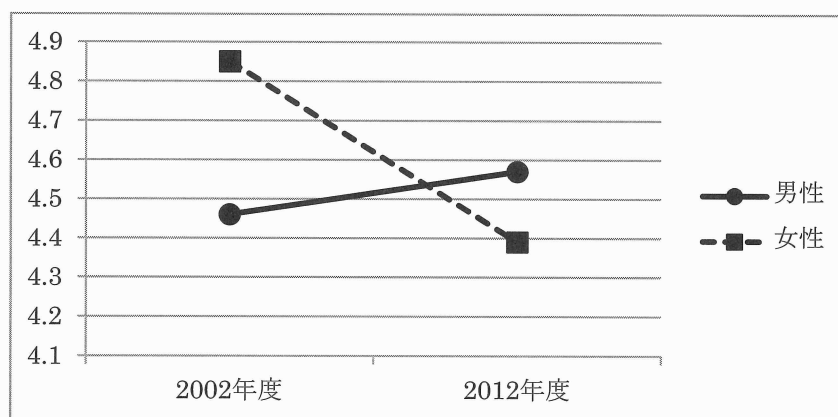


図2. 学生の理解度にあわせた講義のペースにするべきだ

負担になるような講義は困る

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。この項目でも得点はすべて4点台であり、「課題(宿題・レポート)が負担になる講義は困る」と思っている。

(10) 講義中に冗談を言ったり、間をとったりする教員は好きだ

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。4点台後半から5点台の得点であり、冗談を言い、間を取る教員を好んでいることがわかる。

### 3. 講義の履修にかかわる項目(表3)

(11) 講義概要を読んで興味をもち、履修することが多い

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。すべて4点台であり、講義要項を読んで履修している様子が見える。

(12) 講義は時間割の都合上、仕方なく履修することがある

年度に主効果があり( $p < .01$ )、2002年度の得点が高かった。「時間割の都合で仕方なく履修する」という傾向は、いくらか減少しているものの、すべて得点は4点台である。時間割の都合が、履修する科目に影響を与えていると言える。

(13) 大学までの交通の便が履修に影響を与えていると思う

年度に主効果があり( $p < .05$ )、2002年度の得点が高かった。10年間のあいだに交通の便が良

くなったことは間違いなく、「交通の便が履修に影響を与えている」ことは減少している。しかし、2012年度でもまだ交通の便の影響は残っていると見えよう。

(14) 履修要項と実際の講義内容にギャップがあっても仕方がない

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。すべての得点がニュートラル・ポイントを下回る3点台であった。つまり、「履修要項と実際の講義内容にギャップがあるのは良くない」と思っていることがわかる。

(15) 講義は教員の名前で選ぶようにしている  
年度に主効果があり ( $p<.05$ ), 2002年度得点が高かった。得点としては、ニュートラル・

ポイントあたりである。「教員の名前で講義を選ぶこと」はどちらとも言えないという回答である。

4. 成績に対する意識にかかわる項目 (表4)

(16) 大学では何よりも成績が大切である

年度に主効果があり ( $p<.001$ ), 2012年度の得点が高かった。男女ともに、2002年度では、「反対」の方向の得点であったのに、2012年度では「賛成」の得点となっている。「ゆとり教育」世代の方に成績学歴尊重主義がうかがわれる。

(17) 単位認定に対する評価にあいまいさを感じる

年度に主効果があり ( $p<.001$ ), 2002年度の

表3. 講義の履修にかかわる項目

		2002年度		2012年度		年度 F値	性別 F値	交互作用 F値
		n	平均値 (SD)	n	平均値 (SD)			
11. 講義概要を読んで興味をもち、履修することが多い	男性	98	4.31 (1.13)	155	4.25 (1.40)	.05	1.75	.05
	女性	66	4.45 (0.86)	57	4.46 (1.24)			
12. 講義は時間割の都合上、仕方なく履修することがある	男性	98	4.87 (0.85)	155	4.62 (1.23)	7.87 **	1.83	.44
	女性	66	4.79 (0.79)	57	4.39 (1.05)			
13. 大学までの交通の便が履修に影響を与えていると思う	男性	98	4.53 (1.44)	155	4.20 (1.70)	5.40 *	1.64	.16
	女性	66	4.38 (1.30)	57	3.91 (1.54)			
14. 履修要項と実際の講義内容にギャップがあっても仕方がない	男性	98	3.33 (1.35)	155	3.15 (1.39)	.30	1.91	.50
	女性	66	3.03 (1.05)	57	3.05 (1.06)			
15. 講義は教員の名前で選ぶようにしている	男性	98	3.44 (1.25)	155	3.14 (1.36)	5.13 *	1.92	.02
	女性	66	3.65 (1.00)	57	3.32 (1.23)			

表4. 成績に対する意識にかかわる項目

		2002年度		2012年度		年度 F値	性別 F値	交互作用 F値
		n	平均値 (SD)	n	平均値 (SD)			
16. 大学では何よりも成績が大切である	男性	98	2.92 (1.25)	155	4.08 (1.43)	49.24 ***	.99	1.08
	女性	66	2.92 (1.18)	57	3.79 (1.15)			
17. 単位認定に対する評価にあいまいさを感じる	男性	98	4.66 (1.05)	155	4.06 (1.39)	32.16 ***	4.28	1.11
	女性	66	4.53 (0.90)	57	3.65 (1.04)			
18. 試験の点数だけで成績が決まるのは納得ができない	男性	98	3.98 (1.56)	155	3.72 (1.65)	7.77 **	6.70 *	1.36
	女性	66	4.59 (0.98)	57	3.95 (1.22)			
19. 講義の内容は自分の将来に役立つ	男性	98	3.66 (1.13)	155	3.65 (1.23)	.72	1.46	.57
	女性	66	3.61 (1.04)	57	3.40 (1.00)			
20. 大学の成績と将来社会に役に立つ人間になるかは関係ない	男性	98	4.49 (1.22)	155	4.14 (1.35)	1.83	.74	1.20
	女性	66	4.21 (1.25)	57	4.18 (1.21)			

得点が高かった。いずれもこの意見に「賛成」の得点を示しており、「単位認定の評価にあまりまいさを感じている」ようである。その傾向は10年間で低下しているが、まだそう思っているという反応である。

(18) 試験の点数だけで成績が決まるのは納得ができない

年度に主効果があり ( $p<.01$ )、2002年度の得点が高かった。また、性別の主効果があり、女性の得点が高かった (図3)。「ゆとり教育」世代は、試験の点数だけで成績が決まることについて、「ゆとり教育」世代前よりも納得する方向の反応である。

(19) 講義の内容は自分の将来に役立つ

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。いずれもニュートラル・ポイントあたりの得点であり、この意見については、賛成で

も反対でもないと言える。

(20) 大学の成績と将来社会に役に立つ人間になるかは関係ない

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。すべての得点が4点を超過しており、「大学の成績と将来役立つ人間になる」こととは関係ないと思っていることがうかがわれる。

### 5. 教員の教室管理にかかわる項目 (表5)

(21) 大学の教員はマナーの悪い学生をきちんと叱るべきだ

年度に主効果があり ( $p<.01$ )、2002年度の得点が高かった。また性別に主効果があり ( $p<.05$ )、男性の得点が高かった (図4)。すべて得点が4点以上で高く、「教員がマナーの悪い学生を叱るべきだ」と思っている。その傾向は、10年間で減少しているものの、いずれも男

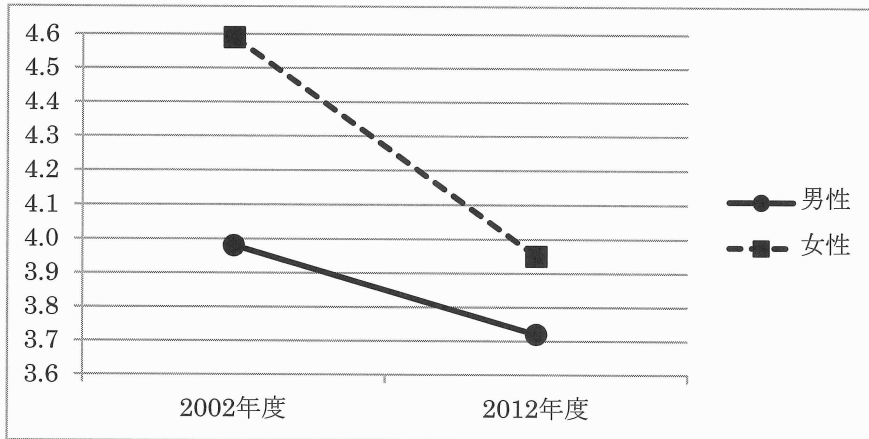


図3. 試験の点数だけで成績が決まるのは納得ができない

表5. 教員の教室管理にかかわる項目

		2002年度		2012年度		年度 F 値	性別 F 値	交互作用 F 値
		n	平均値 (SD)	n	平均値 (SD)			
21. 大学の教員はマナーの悪い学生をきちんと叱るべきだ	男性	98	4.92 (1.02)	155	4.54 (1.29)	11.84 **	4.68 *	.17
	女性	66	4.70 (0.91)	57	4.21 (1.13)			
22. 私語をしてもよい雰囲気 of 講義は教員に責任がある	男性	98	4.27 (1.30)	155	3.92 (1.39)	12.20 **	1.04	1.15
	女性	66	4.27 (1.14)	57	3.61 (1.22)			
23. 講義中の居眠りは講義の妨げにならないなら構わない	男性	98	4.41 (1.17)	155	4.70 (1.19)	9.32 **	8.69 **	.52
	女性	66	3.95 (1.01)	57	4.42 (0.89)			

性に強いことが分かる。

(22) 私語をしてもよい雰囲気の講義は教員に責任がある

年度に主効果があり ( $p<.01$ ), 2002年度の得点が高かった。私語の責任は、教員にあるという考えが、薄らいでいる様子が見られる。

(23) 講義中の居眠りは講義の妨げにならないなら構わない

年度に主効果があり ( $p<.01$ ), 2012年度の得点が高かった。また性別に主効果があり ( $p<.01$ ), 男性の得点が高かった (図5)。居眠りについて、「ゆとり教育」世代は許容的になり、その傾向は男性に強いことが読み取れる。

6. 学生の講義への要望にかかわる項目 (表6)

(24) 教員には 講義に集中しやすい雰囲気作りをしてほしい

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。得点はすべて4点台であり、「講義に集中しやすい雰囲気作り」に「賛成」という反応である。

(25) 学生の関心を引く話し方であれば講義が面白くなる

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。得点はすべて4点台であり、「学生の関心を引く話し方」に「賛成」している。

(26) パワーポイント・板書が見やすいことは

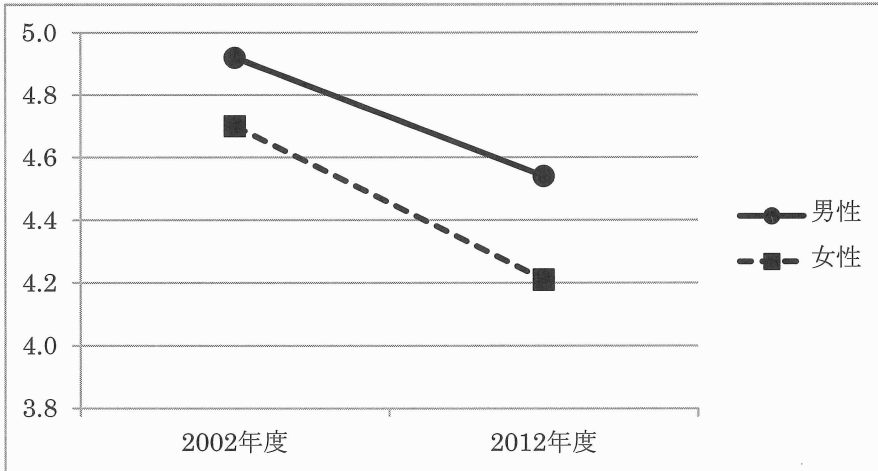


図4. 大学の教員はマナーの悪い学生をきちんと叱るべきだ

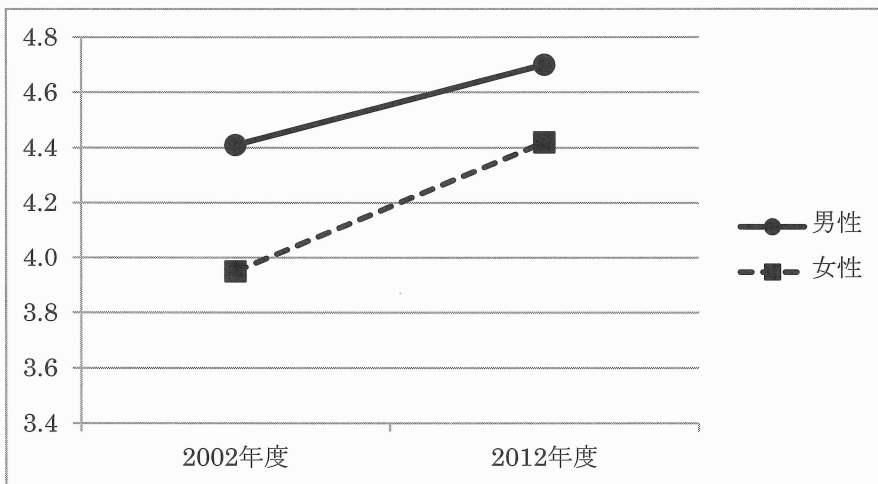


図5. 講義中の居眠りは講義の妨げにならないなら構わない



大切だ

年度に主効果があり ( $p<.01$ ), 2002年度の得点が高かった。2002年度調査では、パワーポイントは入っていないが、2012年度調査でこの用語を追加した。2012年度の得点が下がっているのは、教員がパワーポイントを使用することが増えたことによるのかも知れない。いずれにせよすべての得点が5点台であったのは、この項目だけであり、学生は「パワーポイント・板書」の見やすさが大切だと思っている。

(27) 学生が参加できるように工夫された講義を望んでいる

年度に主効果があり ( $p<.05$ ), 2002年度の得点が高かった。すべて4点台であり、「学生が

参加できるように工夫された講義を望んでいる」と言える。

(28) 興味がないのに必修科目だから受けなければならないのは嫌だ

年度に主効果があり ( $p<.001$ ), 2002年度の得点が高かった。2002年度の得点は5点台と高く、2012年度でも4点台で低下してはいるものの、「興味がない必修科目を受けるのは嫌だ」と思っている。その科目がなぜ必修科目になっているのかを、学生に理解させることが必要であろう。

7. 学生の講義に対する考え方にかかわる項目 (表7)

(29) 卒業のために仕方がなく講義を履修する

表6. 学生の講義への要望にかかわる項目

		2002年度		2012年度		年度 <i>F</i> 値	性別 <i>F</i> 値	交互作用 <i>F</i> 値
		<i>n</i>	平均値 (SD)	<i>n</i>	平均値 (SD)			
24. 教員には講義に集中しやすい雰囲気作りをしてほしい	男性	98	4.58 (0.95)	155	4.54 (1.14)	1.37	.07	.57
	女性	66	4.64 (0.82)	57	4.42 (0.91)			
25. 学生の関心を引く話し方であれば講義が面白くなる	男性	98	4.91 (0.85)	155	4.92 (1.10)	.38	.06	.23
	女性	66	4.83 (0.81)	57	4.95 (0.72)			
26. パワーポイント・板書が見やすいことは大切だ	男性	98	5.50 (0.75)	155	5.12 (1.07)	11.21 **	.20	.20
	女性	66	5.50 (0.64)	57	5.21 (0.88)			
27. 学生が参加できるように工夫された講義を望んでいる	男性	98	4.34 (1.00)	155	4.18 (1.45)	4.60 *	.31	.98
	女性	66	4.55 (0.96)	57	4.12 (1.09)			
28. 興味がないのに必修科目だから受けなければならないのは嫌だ	男性	98	5.03 (1.10)	155	4.66 (1.40)	13.12 ***	.44	.79
	女性	66	5.06 (0.93)	57	4.46 (1.10)			

表7. 学生の講義に対する考え方にかかわる項目

		2002年度		2012年度		年度 <i>F</i> 値	性別 <i>F</i> 値	交互作用 <i>F</i> 値
		<i>n</i>	平均値 (SD)	<i>n</i>	平均値 (SD)			
29. 卒業のために仕方がなく講義を履修する	男性	98	4.09 (1.14)	155	4.25 (1.31)	.78	5.99 *	.05
	女性	66	3.79 (1.16)	57	3.88 (1.27)			
30. 聞いていなくてもノートさえあれば単位がとれる講義が好き	男性	98	4.29 (1.24)	155	4.30 (1.44)	1.22	3.34	1.07
	女性	66	3.85 (1.39)	57	4.18 (1.40)			
31. 講義を受けていることが苦痛である	男性	98	3.48 (1.21)	155	3.34 (1.37)	1.85	.01	.15
	女性	66	3.55 (0.98)	57	3.30 (1.40)			
32. 履修登録をするときに教員が出席を取るかどうかを重視する	男性	98	3.72 (1.43)	155	3.95 (1.51)	.01	.01	1.76
	女性	66	3.95 (1.26)	57	3.75 (1.44)			
33. 講義中に配布されるプリントなどの資料は役に立たないことが多い	男性	98	3.79 (1.25)	155	3.52 (1.22)	3.78	.46	.00
	女性	66	3.88 (1.14)	57	3.61 (1.26)			

性別に主効果があり ( $p<.01$ ), 男性の得点が高かった。女性の得点は3点台, 男性の得点は4点台で, 男性の方が「卒業のために仕方がなく講義を履修する」ことが多いと言える。

(30) 聞いていなくてもノートさえあれば単位がとれる講義が好き

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。どちらかといえば、「賛成」の方向の得点である。

(31) 講義を受けていることが苦痛である

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。すべての得点が、ニュートラル・ポイントを下回っている。「講義を受けていることに苦痛を感じる」ことは、どちらかというとき少ないことがうかがわれる。

(32) 履修登録をするときに教員が出席を取るかどうかを重視する

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。ニュートラル・ポイントあたりの回答であり, 出席を取るかどうかを重視することに関して「どちらとも言えない」という反応である。

(33) 講義中に配布されるプリントなどの資料は役に立たないことが多い

調査時期ならびに性別ともに有意差はなかった。この項目も、ニュートラル・ポイントあたりの回答であり, 「どちらとも言えない」ようである。

### 3. 授業観のタイプ別の分析結果

2つの年度を合わせて33項目を一般化された最小二乗法, バリマックス回転により因子分析したところ, 表8の結果を得た。第1因子は7項目からなり先行研究同様「自己の勉学態度」とした。第2因子は6項目からなり「教員への要望」にとどまらず授業全体への要望の項目から構成されていると考え「授業への積極的要望」と命名した。第1因子ならびに第2因子の $\alpha$ 係数は, それぞれ.74と.71であった。この2軸で, 杉山・二宮・竹市・小出(2012)に従って図1の横軸を「教員への要望」から「授業への積極的要望」に読み替え, 授業観のタイプ分けを行った。その結果(表9), 2002年度に「要求実直」タイプが, 2012年度に「受容勉学」タイプが多いことが分かった。

「ゆとり教育」世代の方が, 授業への積極的な要望が弱くなっていると言えよう。

表8. 因子分析の結果

	因子	
	1	2
30. 聞いていなくてもノートさえあれば単位がとれる講義が好き	<b>.736</b>	-.018
29. 卒業のために仕方がなく講義を履修する	<b>.692</b>	.090
32. 履修登録をするときに教員が出席を取るかどうかを重視する	<b>.608</b>	-.009
31. 講義を受けていることが苦痛である	<b>.533</b>	-.005
9. 自宅でする課題(宿題・レポート)の量が負担になるような講義は困る	<b>.477</b>	.153
33. 講義中に配布されるプリントなどの資料は役に立たないことが多い	<b>.446</b>	-.011
23. 講義中の居眠りは講義の妨げにならないなら構わない	<b>.357</b>	.247
24. 教員には講義に集中しやすい雰囲気作りをしてほしい	.028	<b>.776</b>
25. 学生の関心を引く話し方であれば講義が面白くなる	.170	<b>.623</b>
21. 大学の教員はマナーの悪い学生をきちんと叱るべきだ	-.155	<b>.556</b>
26. パワーポイント・板書が見やすいことは大切だ	.194	<b>.550</b>
27. 学生が参加できるように工夫された講義を望んでいる	-.036	<b>.479</b>
22. 私語をしてもよい雰囲気の講義は教員に責任がある	.078	<b>.408</b>

表9. 授業観タイプ分けの年度別人数

		授 業 観				合計
		要求実直	受容勉学	なりゆき	わがまま	
年度	2002年度	55 (33.6)	44 (26.8)	22 (13.4)	43 (26.2)	164
	2012年度	41 (19.3)	68 (32.1)	45 (21.2)	58 (27.4)	212
合計		96 (25.5)	112 (29.8)	67 (17.8)	101 (26.9)	376

( )内は%  $\chi^2_{(3)}=11.37, p<.01$ 

## 【文献】

文部科学省 (2012). 平成24年度学校基本調査 (確定値) の公表について (平成24年12月21日公表) < [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afidfile/2012/12/21/1329238\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afidfile/2012/12/21/1329238_1_1.pdf) > (2013.2.16)

二宮克美・池尻幸栄・磯村倫子・今井護行・桑村幸恵・高木一憲・中村謙治 (2003). 大学生の授業に対する意識 (1). 愛知学院大学情報社会政策研究, 第5巻, 第2号, 1-16.

二宮克美・桑村幸恵・池尻幸栄・磯村倫子・今井護行・高木一憲・中村謙治・稲葉小由紀 (2003). 大学生の授業に対する意識 (2). 愛知学院大学情報社会政策研究, 第6巻, 第1号, 1-9.

杉山佳菜子・二宮克美・宮沢秀次・山本ちか・桑村幸恵 (2008). 大学生の大学授業観に関する縦断的研究 (3) —大学1年生についての分析—. 日本発達心理学会第20回大会論文集, 314.

杉山佳菜子・二宮克美・竹市良成・小出龍郎 (2012). 大

学生の「学士力」自己評価と大学授業観の変化—2008年度卒業生から4年間の調査より—, 愛知学院大学総合政策研究, 第15巻, 第1号, 17-29.

## 【付記】

2012年度調査実施にあたり, 村田尚生先生のご協力を得ました。記して感謝いたします。

※なお, 平成23年度から小学校, 平成24年度から中学校, 平成25年度から高等学校に実施される新学習指導要領は, 「生きる力」を育むという理念のもと, 知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視したものとなっている。いわゆる「ゆとり」でも「詰め込み」でもない教育に取り組むことになっている。この世代が, 大学に進学してくるには, まだ4年ほど先のことになる。

**Abstract:** The present study examined the changes of University students' attitudes toward their classes in ten years. The participants were 164 students (98 males and 66 females) in the Department of Information and Policy Studies at the school year of 2002, and 212 students (155 males and 57 females) in the Department of Policy Studies at the school year of 2012.

Many students in both school years desired more skill such as (usage of Power-Point in the presentation and) writing on the blackboard. On the other hand, they disagreed the opinion about "I can consult with faculty at ease". The agreement of opinions concerning "the managements of classes" and "the demands to lectures" decreased in ten years.

The factor analysis revealed two factors: "attitudes toward own academic study" and "positive demands for classes". Based on two factors, four types of students were found. There were more students in the "acceptance and sincere study" type at the school year of 2012.

**keywords:** attitudes toward their classes, University students, ten years changes

